

無人島レスト ラン

中編

赤鈴

悲劇の始まり

高岡の地元から船で1時間、二人は”神隠しの島”と呼ばれている無人島へと到着した。

時刻は深夜3時。周りは常闇に包まれている。

さすがに無人島と呼ばれるだけあって、人の気配は微塵も感じない。

先の見えない深い森が二人を出迎える。生い茂る木々達が不気味な表情を覗かせる。

思ったよりも島の面積は広い。1周するだけでも、数日はかかりそうだ。

「よし、二手に分かれよう」

そう言い出したのは高岡だった。

「二手に分かれるって、何かあったらどうするんだよ。この森じゃ携帯も使えないだろ」

「大丈夫だよ。”無人島”なんだからさ。なにも起こらないよ。それに、二手に分かれた方が効率いいじゃん？」

「まあたしかにな」

「じゃあ、そういうことで。朝になったらここで落ち合おうぜ」

「おう。気をつけろよ」

「お前もな」

高岡と分かれた山本は、森の奥深くへと入り込んでいく。時折、カラスの鳴き声が聞こえる。

どこまで歩いてても、同じような道が続くばかり。徐々に体力と気力は失われていく。

もう自分がどこを歩いているのかさえ見失いつつあった。

「この森、思っていた以上に深いな・・・」

山本は力無く呟(つぶや)いた。

季節は夏。その日の夜は蒸し暑く、無性に喉が渴いた。当然持ってきた飲料水に、手が伸びる回数も増えていく。

「やっべ！もう水ほとんどないじゃん！ここらへんで水補給できるとことか・・・ないよなあ」

山本が途方に暮れていると、どこからか美味しそうな匂いが漂(ただよ)ってくる。

「なんだ？この匂いは。まさか、人がいるのか！？」

希望を胸に、山本は匂いのする方へと向かった。

謎のレストラン

しばらく歩くと、少し開けた場所に出た。そこには1軒の小さなレストランが建っていた。

「こんなところにレストラン！？無人島じゃなかったのか、ここは！」

レストランの方へと駆け寄り、山本はレストランをまじまじと見つめる。つくりは古いが、どこからどう見てもレストランだ。

「俺はキツネかタヌキに化かされているのか？」

山本は驚きの表情を隠せずにいた。しかし、それと同時に“人がいる”という安心感も芽生えていた。

「とにかく中に入ってみるか。人がいるかもしれない」

意を決して中へと踏み込んだ。扉が不気味な音をたてて開く。

中は薄暗く、店の中央にテーブルと椅子が1つずつあるだけ。実に殺風景な内装だ。

そのさらに奥には、厨房へと続いているであろう通路もある。

「すみませ〜ん。どなたかいらっしゃいませんかあ〜？」

返事は返ってこない。相変わらず、人の気配も微塵も感じない。

「いるわけないよな。それに、こんなところで店が成り立つわけないし」

山本が店を後にしようとして背中を向けた、その時だった。

「いらっしゃいませ」

山本の背後から男の図太い声が聞こえた。

驚いて山本が振り返ると、そこには薄汚れた黒いタキシードを着た40代半ばくらいの男性が立っていた。

髪は少しボサボサで、目も少し虚(うつ)ろだ。

山本は直感的に”ヤバイ！”と思った。しかし、恐怖で体が言うことを聞かない。

「お一人様でいらっしゃいますか？」

唐突にその男は、山本に尋ねた。

「はい」

山本は震える声で答えた。

男は山本を、虚ろなその目で、舐めまわすように見つめる。

「では席へご案内致します。こちらへどうぞ。申し遅れました。私、神部と申します。以後、お見知りおきを」

神部と名乗ったその男は、山本を店の中央にある席へと案内した。相変わらず照明は薄暗いまままだ。

しばらくすると、神部が山本の席に1杯の水を持ってきた。

「今夜は蒸し暑いですからねえ。喉が渴いたでしょう。どうぞ、お飲みになってください。すぐに料理をご用意致しますので」

「料理？そんなもの注文してませんけど」

「料理は私からの気持ちです。お腹、空いてませんか？」

たしかにお腹は減っていた。喉も渴いていた。

しかしそれ以上に、この神部という男性に対しての恐怖心があった。

「そんな！悪いです。それに、あまりお腹減ってませんから」

そう言い終わるか、終わらないかのタイミングで、山本のお腹の虫が店内に鳴り響く。

その後、少しの間、静寂に包まれた。

「すぐにお持ち致します。少々お待ちくださいませ」

そう言うと神部は深々と頭を下げ、奥の厨房へと消えていった。

食材

しばらくすると、神部がフォークとナイフを片手に戻ってきた。

山本のテーブルにフォークとナイフが並べられる。どうやら料理というのはステーキのようだ。

「肉の焼き方はどうなさいますか？」

「じゃあ、ミディアムレアで」

「かしこまりました」

そう言うと、神部はまた厨房へと消えていった。

厨房からは肉の焼ける心地いい音が微(かす)かに聞こえる。美味しそうな匂いも漂ってきた。

「大変お待たせ致しました」

神部がステーキ皿に乗せられた、分厚いステーキを持って戻ってきた。ステーキからは肉汁がこぼれている。

山本は思わず唾(つば)を飲み込んだ。

「どうぞ召し上がってください」

「ほ、本当に食べていいんですか！？お金持ってないんですよ？」

「最初に申しましたように、この料理は私からの気持ちですから。代金は結構でございます」

「じゃあ折角なんで・・・いただきます！」

その肉は柔らかく、肉厚で、噛むほどに肉汁が肉から溢(あふ)れ出た。

味は牛とも、豚とも、違う味がした。しかし、その味はまさに美味の一言。

「神部さん、このステーキめちゃくちゃ美味しいです！ところで、これは何の肉ですか？」

山本が神部にそう尋ねると、神部はニヤッと薄ら笑みを浮かべた。

「高岡さん、お元気ですか？」

不意に神部が、山本に尋ねた。

「ええ、元気だと思いますよ。この島へも一緒に来たんです」

神部の問いに対して、不思議に思いながらも、山本は答えた。

「ところで神部さん、どうして高岡の事をご存知なんですか？」

「肉」

「えっ？」

「肉、美味しかったですか？」

「あっ、はい。とても美味しかったです」

「そうですか。美味しかったですか」

そう言うと、神部は狂ったように笑い始めた。山本は啞然(あぜん)としている。

「高岡さんも、山本さんに美味しく食べてもらえて、さぞお喜びでしょうね」

山本は、神部が言っている言葉の意味が理解できずにいた。

「どういう・・・意味ですか？」

「まだお分かりになりませんか？あなたが今食べた、そのステーキ！それはあなたのご友人、高岡さんの・・・人間の肉なんですよ！！」

「そんな馬鹿な！！そんな事・・・ありえない！」

「そうそう、これはお返ししときますよ。高岡さんのお荷物です」

山本の目の前に放り出されたそれは、血で真っ赤に染まってはいるが、間違い無く高岡の荷物だった。

「そんな・・・まさか・・・！」

「調理の際、暴れて大変だったんですよ。まあすぐに大人しくさせましたけどね」

「うっ・・・！！」

山本は猛烈な吐き気に襲われた。それと同時に、恐怖心が蘇った。

「折角食べたのに吐いちゃうなんて勿体無(もったいな)いことをしますねえ。ククク・・・」

「逃げなきゃ！」山本は本能的にそう思った。逃げなければ、次は自分が殺される。

山本の額に汗が滲(にじ)む。その汗が暑さからなのか、それとも恐怖からなのかは分からない。

山本は恐怖でただただ、動けずにいた。神部はその山本の姿を見て、ただ薄っすらと笑っていた。

～後編へ続く～

